The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	内藤湖南先生を憶ふ
Author(s)	今井, 貫一
Citation	懐徳. 1934, 12, p. 24-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

に先生の偉大なる御人格崇高なる御學德が偲ばれ、敬慕惜く能はざるのでありますが、他の方面のことはしばらく置き、以上懷德堂を中心とした二三のことを申上げ、追悼の微意を表する次第であります。今や吾々は先生に永訣して再び懷德堂に於て溫容を拜することは叶ひませんが、先生の英魂は必ずや永く堂を擁護せらるゝものと信じます。されば吾々懷德堂に關係を持つ者としては聽講生と言はず、役員、職員といはず、深く先生の御遺志を體し、本堂の宗旨とするところを勉め、益々それを發揚することが即ち先生の尊靈を慰めまつることゝもなり、又多年の御知遇に酬ゆる所以であると存ずる次第であります。（昭和九年九月一日述）

內藤湖南先生を憶ふ

今井貫一

明治三十六年の春、私は大阪圖書館に就任の當時、湖南先生を大阪朝日新聞社に訪ふて初めてお目にかゝつた。その頃の大朝社は昔の藏屋敷を其まゝ使用したもので、南の長屋門を入り、右折すると式臺付の槍でも懸つてゐそうな玄關があつた。その玄關で取次の老婦人に案內を請ひ、通されたのは玄關左方の編輯室の緣端であつた。その緣端を應接場として西村碩園先生と共に湖南先生に初めて敬意

を表したのである。私が兩先生を訪問した目的は其ころにも行はれて居つた新聞社に對する就任の形式的挨拶といふのではなく、兩先生が讀書界知名の大家であつたから、教を請ひ指導を受けんが爲めであつたが、兩先生は豫で圖書館の開設を待望されて居つたことでもあり、旁初對面の私を歡迎して舊知の如くに待遇せられ、最初から懇切に圖書蒐集の要訣などを教示せられたことを今も能く記憶して居る。爾來碩園先生には二十年湖南先生には三十年の知遇を辱ふし、其間渝らざる厚誼に浴したことは私の至幸として終生忘れがたきところである。

右の如く私の湖南先生との初對面は碩園先生と同時であつて、長矮兩先生に挾まれ左右から交々親切なるお話を承つた當時の印象いつまでも消へがたく、且其後の兩先生との交誼上共同のことが多かつた爲めでもあらうか、私にはいつも兩先生を聯想して一所に思ひ浮べられ、かやうに今湖南先生を追憶するに當ても直に碩園先生が引合に思ひ出さるゝのである。それにつれて思ひ起さるゝことは五六年前の秋、土屋大夢翁と共に瓶原に伺つた時、先生は待ち受けられたやうにして私共に告げられたことである。それは豫て先生が擔當せられたる碩園先生の碑文が完成して、數日前來訪の西村未亡人及び大朝社の後醍院正六氏に渡されたこと、並に其節未亡人が幸に餘財を有して碩園文集を印行せんとする決意を先生に申出られた由を大に喜び話されたことである。その時私は先生が亡友を懷ふことの篤きに感じ、先生滿悅の溫顏今尙眼底に在るが、その先生を初め此話中の人既に盡く白玉樓中に移

り、今は唯私一人が往時を偲ぶのは誠に落莫の感に禁へぬのである。

湖南先生の大阪時代の住居は私が知つてから大手町であつた。その頃私はそれから數丁の德井町に居つたので屢先生をお宅に訪問した。圖書館に備付けんとする漢籍は緩急の順序宜しきを得るやうにとて、先生所藏の書目答問に綿密に一二三の購入順番を朱書して審かに說示されたのはこの大手町の先生の書齋であつた。汗牛充棟もたゞならぬ漢籍のうちから適切なものを組識的に撰ばんとして、幸に亡羊の歎を免れ得たのは、かくして實に先生の指導に負ふところが多かつたのである。或冬の午後火鉢の火の盡きたのにも頓着せず、熱心に富永仲基を論じ、慈雲尊者を讃嘆せられたのもその書齋であつた。先生は東京に於て一たび藏書燒失の厄に遭はれ、大阪に來られてから再び收儲せられたのであるが、大手町の書齋には其ころ既に一大文庫を成して居られたやうであつた。先生と一二時間の談話にはいつしか座邊に典籍の山を爲すがの常例であつたが、それは此大手町時代からの見なれた先生の書齋光景であつた。今年二月瓶原にお見舞した日も、褥上の先生雪の日の寒氣を厭はず、令夫人に命じて相變らず數々の珍書を文庫より取り寄せられ、私と同伴者とに示されたが、其折は實に恐悚に堪へなかつた。

湖南先生が書誌學界の泰斗と仰がれ、斯道に寄與せられたるところ極めて多かつたことは申すまでもなく、單に私が關係し或は敎を受けたことだけでも少くない。其うち最近私が最も感激したことは

昨年出版した正平版論語影印に關してのことである。一昨年私は圖書館創立並に私も在職三十年になるのを記念せんが爲めに、圖書館珍藏の正平祖版論語集解を複製せんことを思立ち、先生を訪ふて指導を請ふた。其時先生は大に其擧に贊同せられ、且進んで申さるゝには、自分は豫てより日本に於ける論語本の傳統を研究する必要を感じ、又研究の腹案もあるが、近ごろ健康を害して殘念ながら自ら整理することが困難である。就ては我國論語版本の祖たる圖書館所藏正平本の複製を好機會とし、武內義雄博士に囑してその研究を煩はし、それを影印本に附載することゝなれば、一層學界を資益し、また計畫の意義を深くすることゝなり、併せて自分の宿志を果すことゝなるから、是非それを遂行するやうにといふお勸めであつた。私はこの適切なる注意を承つて歡喜措く能はず、深く厚意を感謝すると同時に、更に先生の斡旋を願ふたのであつたが、先生は即時仙臺の武內博士に檄を飛ばされたものと見へ、それから僅かに數日にして武內博士快諾の旨を先生から通知せられその敏速に驚いたのであつた。私の記念出版が意外の成果を得たのも一はかゝる先生の考慮に基因してゐるのである。

かやうに私に關はることで先生を追憶するなれば次々に色々なことが思ひ出さるゝが、餘はたゞ私のみの懷しき記憶に留めて省略し、最後に懷德堂に寄與せられたる多大の厚意に對し、私も一言微衷を披きて先生に謝意を表したい。初め碩園先生が、大阪人文會に蘭洲を論究し、引て懷德堂諸先賢の業績を闡明し、遂に主唱して同志に勸め、懷德堂師儒の報謝祭典を擧行することゝなつた時には、湖

南先生は既に大阪を去て京都大學に在られたが、先生はこの大阪の先賢祭には熱心に翼賛し、碩園先生等の事業を援助されたのであつた。次で懷德堂再興となつてからは進で講師となり、又當事者の請を容れて顧問となられ、終始熱心に堂の發達に貢獻せられたことは、關係者一同深く感銘するところで、私がこゝに申述べるまでもないことである。私は先生を懷德堂にお迎へするたびに、いつも物を慈育さるゝやうな溫情を感じ、同志と共に意を強くしたのであつたが、今より後再びあの溫容を懷德堂に拜することの出來ぬのは、返々も痛恨の極みである。